



自然遊学館 だより



2007 SUMMER

No. 44



■2007.7.18 発行 貝塚市立自然遊学館

■行事レポート

館長と切り絵をしよう

- 「生きもの・自然現象」…………… 1
- 春のハイキング「和泉葛城山」…………… 1
- 二色の浜海岸植物群落調査…………… 3
- 5月の海で遊ぼう「渚の生きもの」…………… 3
- 千石荘の昆虫採集…………… 5
- 「トンボの池」池さらえ 2007 春…………… 6
- 二色浜稚魚放流…………… 8

■生きものよみもの

カマキリタマゴカツオブシムシ

の生活史 3……………9

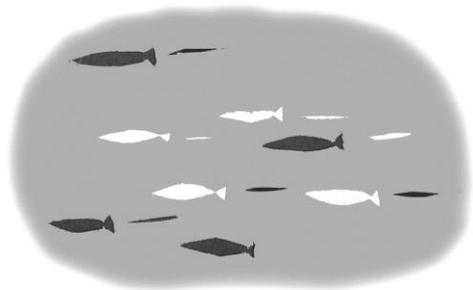
【泉州生きもの歳時記】

二色浜におけるヨモギホンヤドカリ

の出現…………… 11

■館長コーナー

- 夏 2. 水を考える……………12
- 寄贈標本の紹介……………13
- 遊学館スタッフ日誌……………15
- お知らせ……………16



表紙の魚のイラストは二色小学校4年生(当時) 田中貴大さんが2007年3月に作成した切り絵作品を基にしています。

■行事レポート

館長と切り絵をしよう

「生きもの・自然現象」

場所：自然遊学館多目的室

日時：2007年4月15日（日）13:30～16:00

参加者 9人

自然遊学館での切り絵はこれで2回目となりました。写真では迫力に欠けますが、見事に時間内に作品にしました。カエル、ペンギン、イシダイ、アゲハチョウ、ムクドリ羽根、シャコなどに取り組みました。細かな部分も多くありましたが、シャープな線で表現し、生き生きとした作品に仕上がりました。初めての方も見事に出来上がりました。

また、秋にももう1度企画します。一度に多くの人数を受け入れることが出来ませんが、やってみようと思われる方は是非チャレンジしてください。



自分で作った自慢の切り絵です

(川村 甚吉)

春のハイキング「和泉葛城山」

場所：蕎原バス停～和泉葛城山山頂

日時：2007年4月22日（日）9:30～15:00

参加者 20人

2,3日前の雨に加え、当日も雨の予報でした。植物や鳥、ほ乳類の足跡を探しながら、ゆっくり登る予定とはいえ、平地観察ではなく山登りですから、行事は中止になりました。

「中止でも、スタッフは行きますので、自由参加となります」と連絡し、現地にむかいますと、17名もの方が参加希望でした。

どんよりとした天気の中、雨の具合をみながら行ける所まで行く、ということで歩き始めました。集合場所の蕎原バス停から春日橋までは、車を避け、川と田畑に沿った道を行いました。ちょうどスミレの時期で、バス停付近では、白いアリアケスミレ、少し行くとタチツボスミレ、ナガバナタチツボスミレがたくさん咲いていました。ヤブニンジンの白い花、キランソウの紫の花もめだちました。ほかにはシキミ、カキドオシ、シャガ、ウマノアシガタなど。雨の心配があるので、先に進むことにしました。春日橋から葛城山Aコースにむかうと、まだ縮れた葉をつけたイワタバコ、ヤマアジサイ、ミカエリソウがみられ、さらに登るとタムシバの白い花がとてもきれいでした。

途中から雨がポツポツしてきましたが、ここまで登るとあとは頂上まで頑張るしかありません。小雨のなか頂上で昼食をとり、一気にBコースを下山。観察はあまりできませんでしたが、全員、葛城山登山を終えることができました。



小雨の登山道を行く

2007年4月18日(下見)に観察した植物

くきく科>ノアザミ、コオゾリナ、テイショウソウ、モミジガサ <ききょう科>ホタルブクロ、タニギキョウ <おみなえし科>ツルカノコソウ <すいかずら科>ニワトコ <あかね科>アカネ <いわたばこ科>イワタバコ <なす科>ハシリドコロ <しそ科>ヒメオドリコソウ、カキドオシ、キランソウ、ミカエリソウ <むらさき科>ヤマルリソウ <はいのき科>タンナサワフタギ <つつじ科>コバノミツバツツジ、モチツツジ、ウスノキ、カクミノスノキ <りょうぶ科>リョウブ <みずき科>ハナイカダ <せり科>オヤブジラミ、ヤブニンジン <うごぎ科>ミヤマウコギ <あかばな科>コマツヨイグサ <じんちょうげ科>コショウノキ <きぶし科>キブシ <すみれ科>アリアケスミレ、タチツボスミレ、ナガバノタチツボスミレ、シハイスミレ、エイザンスミレ <つばき科>ヒサカキ <かえで科>イロハモミジ、ウリカエデ <もちのき科>イヌツゲ <とうだいぐさ科>コバンノキ <みかん科>ミヤマシキミ <ばら科>ダイコンソウ、ナガバノモミジイチゴ、ヤマブキ、ウラジロノキ <ゆきのした科>ユキノシタ、ヤマネコノメソウ、チャルメルソウ、イワボタン、ヤマアジサイ、マルバウツギ、ネコノメソウ

<べんけいそう科>ヒメレンゲ <あぶらな科>タネツケバナ、ハクサンハタザオ、オオタネツケバナ、マルバコンロンソウ、ユリワサビ <けし科>クサノオウ、ジロボウエンゴサク、ミヤマキケマン <くすのき科>カゴノキ、アブラチャン、クロモジ <もくれん科>タムシバ、ホオノキ <しきみ科>シキミ <つづらふじ科>オオツズラフジ <めぎ科>メギ <きんぼうげ科>ウマノアシガタ、ユキワリイチゲ、キツネノボタン、ニリンソウ、トウゴクサバノオ <なでしこ科>ミミナグサ <たで科>スイバ、イタドリ <うまのすずくさ科>イズミカンアオイ <やどりぎ科>ヤドリギ <いらくさ科>コアカソ、カテンソウ <ぶな科>ブナ、イヌブナ、アカガシ <かばのき科>ミズメ <せんりょう科>ヒトリシズカ <らん科>ミヤマウズラ <あやめ科>シャガ <ゆり科>ウバユリ、ショウジョウバカマ、ユキザサ <いぐさ科>ヌカボシソウ <さといも科>セキショウ、マムシグサ <かやつりぐさ科>ミヤマカンスゲ、カンスゲ <いね科>スズメノテッポウ、ミヤコザサ <やし科>シュロ <うらぼし科>クリハラン <おしだ科>ホソバカナワラビ、イノデ、ハカタシダ <ほんぐうしだ科>ホラシノブ <はなわらび科>フユノハナワラビ <とくさ科>ツクシ



ハナイカダ

(湯浅 幸子)

二色の浜海岸植物群落調査

場所：二色の浜

日時：2007年5月12日（土）13:30～15:30

参加者 18人

参加者が少人数なので、多目的室に集まってもらってレジメを配り、二色の浜の海浜植物について簡単に説明してから出発しました。最初に見出川付近まで歩きましたが、渚近く、小さな砂丘一面に広がるハマヒルガオに感嘆の声があがりました。ハマヒルガオを踏みつけないように注意して歩いていると、艶やかで濃い緑の葉をロゼット状に広げ、白い蕾をつけたハマボウフウが見つかります。「スーパーで売っているお刺身には、ビニール製の飾りがついていますが、高級料亭ではハマボウフウが刺身のツマとして使われています」

コウボウムギやコウボウシバは、ハマヒルガオの周辺にそれぞれ群落をつくっています。オカヒジキは海水浴客も通るような浜中央部から近木川近くの砂浜に芽を出し初め、ツルナは浜辺の小さなゴミ山の中と、近木川右岸の陸側に見られました。

ハマヒルガオ群落が復活したことはうれしいのですが、それより陸側では帰化植物の侵入が著しく、シロバナマンテマ・シロバナシナガワハギ・アレチマツヨイグサ・オオオナモミ・ネズミホソムギ等が優占種です。ブイ格納場所付近に昨年から出現したハマゴウが1株健在で、ヨットハーバー近くのホコガタアカザは少しずつ増えてきているようです。

大型の帰化植物、シロバナシナガワハギやオオオナモミを参加者全員で抜き取り、

海浜植物復活を願いながら解散しました。初出現植物はムラサキカタバミです。



ハマヒルガオ満開です

（白木 江都子）

5月の海で遊ぼう「渚^{なぎさ}の生きもの」

場所：近木川河口・二色浜南端

日時：2007年5月19日（土）10:00～15:00

参加者 71人

例年のこの時期、二色浜は潮干狩りの人たちで大賑わいなのですが、今年は昨年引き続き、有毒プランクトンによるアサリの毒化で潮干狩りは自粛^{じしゅく}されている最中でした。観察会の当日は、土曜とあってバーベキューなどの客はかなりいるものの、渚での人出はやはり少なめでした。

午前10時、参加者は館前に集合していただき、今回の講師としてお招きしている大阪府環境農林水産総合研究所の日下部敬之さん他スタッフの紹介などをした後、出発です。この日は潮の一番良くひく時間が2時半頃でしたので、途中、近木川河口を横

切る時は、まだ少ししか現れていない干潟を横目に、午前の観察地である二色浜の南端に向かってぞろぞろと歩いていきました。

二色浜南端の砂浜の波打ち際にはたくさんのアナアオサやワカメなどの海藻類が打ちあがっていました。海での生きもの採集は各自持参したタモ網の他に、今回の目玉として幅4m、高さ1mの大きな稚魚網（網目の大きさ1mm）も使いました。稚魚網は両端の棒を2人が持ち、歩いて網を曳いていきます。網の採集物を陸に引き上げ、容器（プラ船）にあけると、「何か獲れたの？」と興味深々で子どもたちは容器の周りを囲みます。容器の中は一面、緑のアナアオサだらけで、そこから小さな稚魚を見つけ出そうと目を皿のようにして海藻と格闘しなければなりません。しかし今回、稚魚はあまり網に入っておらず、懸命に探した結果、コノシロの仔魚3匹とマハゼの稚魚1匹を見つけることができました。仔魚とは、稚魚より前の発育段階を指し、鱗が未発達で、まだ鱗もない透明な姿をしています。



コノシロ仔魚



マハゼ稚魚

午後からは近木川河口まで戻り、沖に広がった前浜干潟で観察です。こちらの環境は河川水の注ぎ込む汽水域で、干潟は礫の混じる砂泥質です。礫をめくると容易にアラムシロガイなどの巻貝やケフサイソガニ、ユビナガホンヤドカリなどが採集でき、皆のバケツは生きもので一杯になりました。

二色浜、近木川河口で観察した海岸動物 2007年5月19日

			二色浜 南端	近木川 河口	
刺胞動物門	花虫綱	イソギンチャク目	タテジマイソギンチャク	○	
			クロガネイソギンチャク	○	
	鉢虫綱	旗口クラゲ目	アカクラゲ	○	
軟体動物門	腹足綱	アツキガイ科	イボニシ	○	
		オリレヨフバイ科	アラムシロガイ	○	
		タマガイ科	ツメタガイ	○	
		後鰓亜綱	アメフラシ	卵のう	
		二枚貝綱	マルスタレガイ科	アサリ	○
	イタボガキ科	マガキ	○		
	頭足綱	コウイカ目	コウイカ類	殻	
環形動物門	多毛綱	ナナライソメ科	スゴカイイソメ	○	
節足動物門	軟甲綱	端脚目	ヨコエビ類	○	
			ワレカラ類	○	
			ホンヤドカリ科	ユビナガホンヤドカリ	○
			ケアシホンヤドカリ	○	
			ヨモギホンヤドカリ	○	
			テナガエビ科	スジエビモドキ	○
			イワガニ科	モクスガニ	○
			イソガニ	○	
			ヒライソガニ	○	
			ケフサイソガニ	○	
	イチョウガニ科	イボイチョウガニ	○		
棘皮動物門	ナマコ綱	無足目	ヒモイカリナマコ	○	
	ヒトデ綱	ヒメヒトデ目	イトマキヒトデ	○	
			マヒトデ	○	
脊椎動物門	硬骨魚綱	ウナギ科	ウナギ	○	
		ニシン科	コノシロ	○	
		カタクチイワシ科	カタクチイワシ	○	
		カジカ科	アナハゼ類	○	
		スズキ科	スズキ	○	
		ニベ科	シログチ	死骸	
		ボラ科	ボラ	○	
		カレイ科	マコガレイ	○	
		ハゼ科	ミミズハゼ	○	
			ヒメハゼ	○	
	マハゼ	○			
	フグ科	クサフグ	○		
		マフグ	死骸		

(山田 浩二)

千石荘の昆虫採集

場所：貝塚市千石荘

日時：2007年5月27日（日）10:00～15:00

参加者 55人

昆虫採集、それは子どもから大人まで幅広い人気をもつ“遊び”です。お父さんたちも少年時代に一度は楽しんだでしょう。

近年、貝塚市を含む大阪府において、都市開発や宅地開発、幹線道路の発達とともに次々に「里山」的環境が失われてきています。それにともない子どもたちの“遊び場”が野外から屋内に移ってきたものと思います。そういった中で、千石荘の自然は貝塚市にとって貴重な野外の楽園となっています。そこで今回の行事は昆虫採集という遊びを楽しみ、採れた場所や昆虫を確認し好奇心を養おうということで行いました。

天候も良く、絶好の採集日和の中、今年も遊び心満載の竹本卓哉先生をむかえて、バス停のあるロータリーから2グループに分かれてスタートしました。足を踏み入れた瞬間、モンシロチョウとコムスジがヒラヒラと舞い、子どもたちが追いかけて、それをかわきりに競い合うかのようにみんながそれぞれ虫かごを満たしていきました。

あっという間にお昼休み、カメムシマニアの竹本先生は美少女が持ってきたものに目を輝かせました。「これは珍しい！」高野夏子ちゃんが持ってきたのは、カメムシの仲間であるタマカメムシでした。遊学館所蔵標本では、1997年に蓄原で1例のみの確認でした。



いよいよ後半戦。夏子ちゃんのおかげで最高に気分の良くなった竹本先生を先頭に、今回の参加者がおそらく1番の楽しみであったカブトムシ、クワガタムシの採集がスタートしました。時期が1～2週間ほど早かったこともあり、なかなか見つかりませんでした。しかし、そこは昆虫博士の岩崎氏、樹液の出たクヌギからコクワガタを発見しました。また、ご機嫌の竹本先生もコナラの朽ち木からコクワガタ、その付近の腐葉土からカブトムシの幼虫を採集しました。やっぱりみなさんクワガタが大好きなようで、子どもたちに負けず劣らずお父さん方もスコップを片手に没頭していました。特に、西田さんのお父さんの情熱には私自身、しびれてしまいました。

最後に各自が採集したものをみんなの前で発表し、飼育しない昆虫を逃がして行事を終えました。このとき、採集されたものの中に千石荘で久々のクルマバツタ確認かと思われましたが、持ち帰り正確に同定したところトノサマバツタであり残念でした。

以下に今回の行事で確認された種のリストを掲示しています。



カブトムシ幼虫

(確認された昆虫)

トンボ目 アオイトトンボ、モノサシトンボ、キイトンボ、クロスジギンヤンマ、ショウジョウトンボ、シオカラトンボ、コシアキトンボ

バッタ目 ハネナシコロギス幼虫、ホシササキリ幼虫、ヤブキリ幼虫、キリギリス幼虫、ヒメギス幼虫、ツチイナゴ、トノサマバッタ幼虫、ショウリョウバッタ幼虫、ノミバッタ、ヒシバッタ属

カマキリ目 オオカマキリ幼虫、ハラビロカマキリ (古い卵囊)

ゴキブリ目 モリチャバネゴキブリ

ナナフシ目 ナナフシモドキ幼虫、エダナナフシ幼虫、トゲナナフシ幼虫

ハサミムシ目 ヒゲジロハサミムシ

カメムシ目 アワフキムシ科幼虫、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ、ヨコヅナサシガメ、シマサシガメ、アワダチソウグンバイ、ツツジグンバイ、アカスジカスミカメ、ヨコヅナツチカメムシ、マルカメムシ、シロヘリカメムシ、タマカメムシ、ホシハラビロヘリカメムシ、ホソヘリカメムシ科

アミメカゲロウ目 ヤマトクサカゲロウ

コウチュウ目 ヤコンオサムシ、セアカヒラタゴミムシ、ヒゲナガハナノミ、カブトムシ幼虫、コク

ワガタ、クワガタムシ科幼虫、ヒゲコメツキ、シモフリコメツキ、ヨツボシケシキスイ、ヨツボシオオキスイ、ナナホシテントウ、ムーアシロホシテントウ、ユミアシゴミムシダマシ、アカガネサルハムシ、ホソヒメヒラタアブ、ハチモドキハナアブ、ホシアシナガヤセバエ、ヨモギワタタマバエ (虫こぶ)

チョウ目 アオスジアゲハ、クロアゲハ、キチョウ、モンシロチョウ、ヒメウラナミジャノメ、サトキマダラヒカゲ、ヒメウラナミジャノメ、コムスジ、テングチョウ、ベニシジミ、ミズイロオナガシジミ

ハチ目 オスグロハバチ、セグロアシナガバチ、ウメマツオオアリ、トビイロケアリ、アミメアリ、クマバチ、ミツバチ属

(山本 直)

「トンボの池」池さらえ 2007 春

場所：二色市民の森自然生態園

日時：2007 年 6 月 9 日 (土) 10:00～15:00

参加者 56 人

まずは途中ひどい雷雨の中、黙々と池さらえの作業を続けてくれた参加者の皆さんに感謝いたします。

----- . ----- . ----- . -----
1997 年に完成した「トンボの池」ではこれまでに毎年、冬の約 1 ヶ月間、池の水を抜いて池干しを行ってきました (その期間、ヤゴは別の水槽で飼育)。水を抜く前のヤゴの種数と個体数の変化は以下の通りです (図 1：毎年 12 月に調査)。

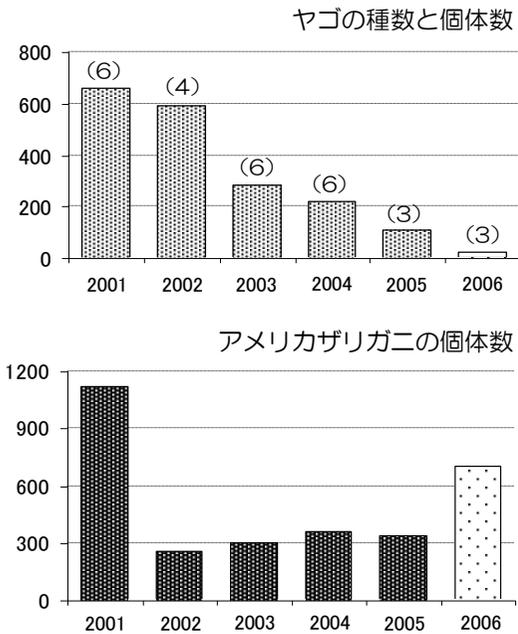


図1. 池さらえ時のヤゴの種数と個体数、およびアメリカザリガニの個体数の変化
上図の () 内の数値はヤゴの種数を示す。
(2006年は池干しをせずに調査、本文参照)

一目瞭然、ヤゴが減ってきたのが分かります。その原因の一部は、天敵であるアメリカザリガニの繁殖ですが、そればかりでは説明できません。各地のビオトープでも、作ってからすぐにトンボが増えるものの、数年後をピークに減り始めるという現象が起こっています（たとえば、川北、2003；大串、2004）。

これらの事情から池の管理の仕方を変更することにしました。2006年の12月には池さらえを行わずに、この6月に池さらえを行い、アメリカザリガニを取り除いた後に、すぐに水とヤゴを戻しました。その時に確認されたヤゴは、アオイトトンボ、シオカ

ラトンボ、タイリクアカネの3種40個体でした。アメリカザリガニは、以前からモンドリを仕掛けて取り除いてきたものの、当日118個体が採集されました。

◆ 2007年6月9日のリスト ◆

トンボ幼虫 3種40個体

アオイトトンボ (19)、シオカラトンボ (7)、タイリクアカネ (14)

他の水生昆虫

フタバカゲロウ属幼虫 (5)、ヒメアメンボ成虫 (1+)、コマツモムシ成虫・幼虫 (6+)、ヒメイトアメンボ成虫 (1)、ケシカタビロアメンボ成虫・幼虫 (38+)、ヒメガムシ成虫 (1)、チビゲンゴロウ成虫 (5)

他の水生動物

アメリカザリガニ小1cm程度 (89)、アメリカザリガニ中・大 (29)、アカテガニ脱皮殻 (1)、サカマキガイ (8+)、ハブタエモノアラガイ (4+)、ヒメモノアラガイ (1)、ヒメタニシ (1)、イシビル科、ミミズ

* 括弧内の数値は個体数を示しています。また、「+」の記号は、採集個体以外に多数目撃したことを示しています。

今回が初めての試みのため、正確に比較できる過去のデータはありませんが、2000年に平峰厚正さんによる指導のもと、貝塚市立第五中学校の生徒が行った調査があります。6月に4回調査して（今回とは違って水は抜かないで調査）、この3種のほか、ギンヤンマ、マルタンヤンマ、ショウジョウトンボ、アオモンイトトンボ、コノシメトンボ、ノシメトンボの合計8種が確認されています。当時のトンボの池はずいぶんにごやかだったんですね。

また、新しい種の加入は2005年4月に確認されたホソミオツネトンボ以来ありません(鈴子、2005)。トンボの池に往時のにぎわいを取り戻し、さらに新たな種を呼び寄せるため、先に述べた池さらえの時期の変更以外にも、ヤゴの餌となる小動物を増やすために、「どんぐりの森」のクヌギやコナラの枯れた枝と葉を池の底に沈め、産卵場所を増やすために水面にヨシの茎を浮かべました。

引用文献

- 大串龍一(2004)「水生昆虫の世界—淡水と陸上をつなぐ生命」、東海大学出版会、219pp.
川北裕之(2003)学校ビオトープのトンボ。
昆虫と自然 38(14):16-20.
鈴子佐幸(2005)自然生態園トンボの池にホソミオツネトンボ。自然遊学館だより 36:12-13.

(自然遊学館わくわくクラブ)

二色浜稚魚放流

場所：二色浜中央部

日時：2007年6月10日(日)14:00~15:30

参加者 179人

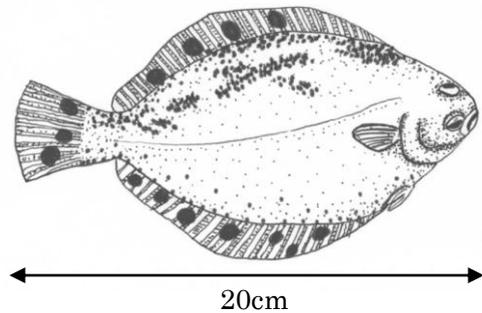
大阪湾でたくさん魚が獲れるようにと、卵から人工的に育てた稚魚を自然の海に放流する栽培漁業を大阪府では行っています。例年、二色浜で放流の際には、睦谷一馬さん(大阪府漁業振興基金・栽培事業場)を講師に館のイベントを兼ねて大勢の参加者の下、賑やかに行っています。

今年、放流する稚魚は昨年、一昨年に続

いてホシガレイです。岬町にある水産技術センターで平成18年1月に生まれたなかの500尾で、全長20cm、体重100gあり、すでに稚魚とはいええないサイズでしたが...

また、今回初めての試みとして、いつどこで放流したものかわかるように魚に標識タグを打ち込む作業にもチャレンジしました。魚を片手の手のひらにのせて、タグガンで背鰭の付け根辺りを狙い、打ち込んでいくのですが、なかなか難しいようでした。この標識は放流したホシガレイが大きくなって採捕された時、放流効果を調べるのに役立ちます。ですので、標識の付いた魚を採捕された方は、ホシガレイの全長と体重、採捕場所、採捕の方法(釣り・漁具等)、標識の色を水産技術センターまでご連絡下さい。

水産技術センター TEL: 072-495-5252



放流したホシガレイ

本日のイベント、大阪湾で幻の魚となったホシガレイの復活作戦は、早速この日の夕方のテレビニュースで放映されました。

(山田 浩二)

■生きものよみもの

カマキリタマゴカツオブシムシ の生活史 3

教科書や図鑑に書かれていることも、最初は誰も答えを知らなかったことばかりです。最初から分かっていることを書いているのではありません。いつか誰かが解いた答えをまとめたものであり、今でも正解ばかりが書かれているとは限りません。分かってしまった後では「そういうもんやろ」ということも、それを知らないうちは中々正解を見つけられないものです。

前回までは、このカツオブシムシの越冬世代の幼虫がカマキリの越冬卵囊を摂食して発育し春に羽化すること、春に羽化した成虫が秋までは生存できない可能性が高いことを紹介しました。今回は、このカツオブシムシがどのように夏を過ごしているのかを紹介します。今では「そういうもんや

ろ」ということになっていますが。

1993年6月8日、堺市豊田の草地において、オオカマキリのふ化後卵囊の表面で、カツオブシムシの雌成虫が腹部の先を動かしているのを、たまたま観察することができました (Iwasaki et al., 1996)。その卵囊を持ち帰って飼育し、6月17日に割ってみると、中にカツオブシムシの若齢幼虫が3個体いました。これは越冬世代の子世代である「第1世代」です。1年に複数の世代を繰り返す生活史の中で、最初の卵の時期をむかえる世代を第1世代と呼びます。

さらに、6月下旬から7月下旬にかけて、堺市と和泉市の数ヶ所の草地で、オオカマキリとチョウセンカマキリのふ化時期を過ぎた卵囊を採集し、準自然条件下で飼育しました。1994年と1998年にも同様の採集、飼育を行いました。図3がその結果です。

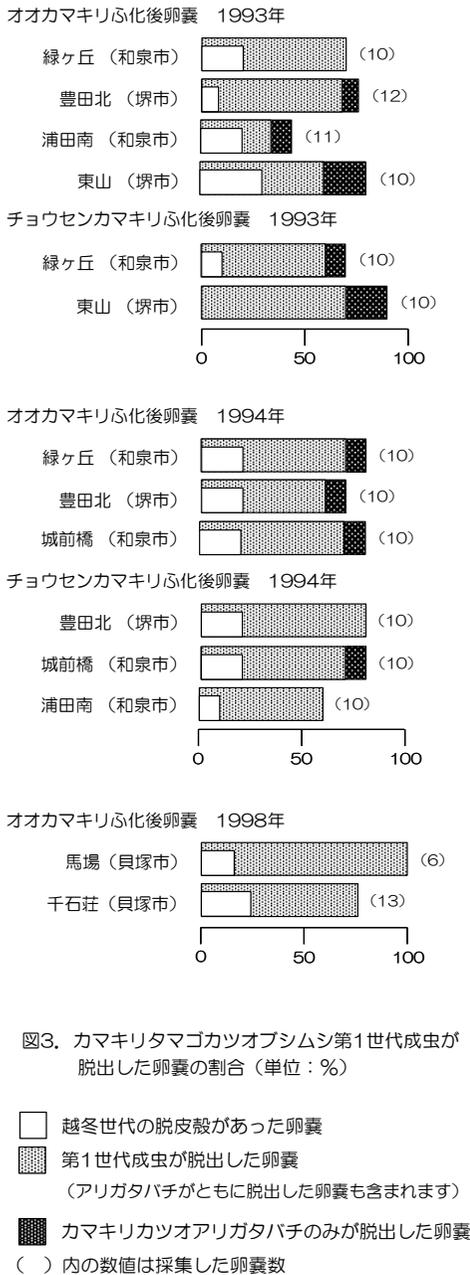


図3. カマキリタマゴカツオブシムシ第1世代成虫が脱出した卵囊の割合 (単位: %)

両年とも、8月から10月にかけて、両種のカマキリのふ化後卵囊からカツオブシムシの成虫が脱出し、その割合は、1割~2割程度だった越冬世代成虫の脱出率よりもかなり高いものでした。さらに、カツオブシムシに寄生するアリガタバチのみが脱出した卵囊 (カツオブシムシは発育の途中で死亡) を含めると、第1世代幼虫による卵囊寄生率はさらに高くなります。この結果は、カマキリのふ化後卵囊が第1世代幼虫にとって恒常的な餌であることを示すとともに、春に羽化した越冬世代成虫が、自らが脱出した卵囊以外のふ化後卵囊を探して産卵していることを示しています。これらの結果から、このカツオブシムシは幼虫で冬を越し春に羽化する越冬世代と、幼虫で夏を過ごし秋に羽化する第1世代という、年に2世代を経過する生活史を送ることが明らかになりました (この場合、越冬世代=第2世代ということになります)。

採集した卵囊は、ふ化後卵囊、未ふ化卵囊 (卵が黒ずむ)、越冬世代幼虫の摂食を受けた卵囊 (脱皮殻で判断) の3つのタイプに分けられましたが、3タイプの間で、第1世代成虫が秋に脱出した割合に有意な差はなく、これらの卵囊を「ふ化後卵囊」としてまとめて扱いました。

話が少しそれますが、カツオブシムシに寄生する体長4mm前後のハチに関して、堺市と和泉市で採集された標本をハチ目の分類が専門の寺山守氏に送ったところ、新種であるという返事をいただき、最近になって、カマキリカツオアリガタバチ *Laelius naniwaensis* として新種記載されました (Terayama, 2006: タイプ標本は堺市大泉緑地、1988年5月27日、山本将博採集)。

第1世代幼虫に寄生したアリガタバチは、1993年は7月28日から10月23日にかけて、1994年は7月11日から9月23日にかけて羽化しました。両種のふ化後卵囊から脱出しましたが、カツオブシムシが寄主なので、カマキリの種類は関係ないと考えられます。

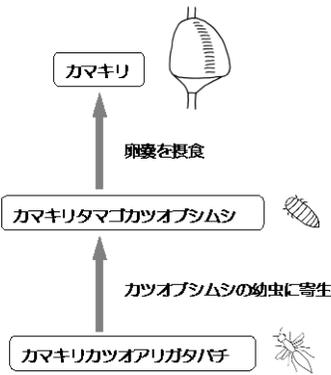


図4. カマキリ、カマキリタマゴカツオブシムシ、カマキリカツオアリガタバチの関係

「カマキリカツオアリガタバチ」という和名は、カマキリの卵囊を摂食するカツオブシムシに寄生するアリガタバチという、捕食と寄生の順序どおりになっています(図4)。敵の敵は味方ということで、カマキリにとってアリガタバチは「餌であるとともに味方でもある」という意味で、実にありがたい存在なのです。

引用文献

Iwasaki, et al. (1996) Applied Entomology and Zoology 31 : 389-395.
 Terayama, M. (2006) Bethyridae (Hymenoptera). The Insects of Japan, vol.1. Touka Syobou.

(岩崎 拓・青柳 正人)

【泉州生きもの歳時記】

二色浜におけるヨモギホンヤドカリの出現

これまで貝塚市の海岸で記録されたヤドカリは、ホンヤドカリ、ケアシホンヤドカリ、ユビナガホンヤドカリ、テナガツノヤドカリ、コブヨコバサミの5種類でした(山田, 2005)。ところが、2007年5月5日に二色浜の石積み護岸においてホンヤドカリ、ケアシホンヤドカリが同所的に生息するなかで、新たにヨモギホンヤドカリ *Pagurus nigrofascia* を4個体採集しました。

ヨモギホンヤドカリは新種記載されたのが1996年と最近であり(Komai, 1996)、文献上の分布記録はあまり多くありません。本種の形態について体色は全体に緑色、触角は赤色と一見するとケアシホンヤドカリに似ていますが、歩脚の指節に黒帯があるのが大きな相違点です。



二色浜に生息するヨモギホンヤドカリ

二色浜においては、さらに5月14日に2個体、5月19日の当館主催観察会で2個体採集されており、多数の個体が生息している

■館長コーナー

夏2.

水を考える

と考えられます。これまで本種の生息に気づかなかったのは、上記のケアシホンヤドカリと誤認していたせいではと思い、過去の画像データを確認すると、2004年2月18日、二色浜海浜緑地で撮影したものは、まさにヨモギホンヤドカリでした。また、三島(2003)によると本種は他の多くのヤドカリとは際立って異なる生活史をもち、夏季に生息域を潮間帯上部の転石下へ移動し、休眠している可能性も示唆されることから、見つかりにくかったことも考えられます。

これらのことから、いつから二色浜に生息していたかは謎に包まれたままですが、今後の生息状況については興味深くモニタリングしていきたいです。また今回、種を判別する際にできるだけ「思い込み」を排除し、別種ではないかという視点をもつことの大切さを改めて実感しました。

本種の大阪湾での生息について議論頂き、二色浜での生息を確認するきっかけになりましたNPO法人南港ウェットランドグループの和田太一氏、これまでの全国の分布記録についてご教示いただきました千葉県立中央博物館の駒井智幸学芸員にお礼申し上げます。

引用文献

- Komai, T. (1996) *Pagurus nigrofascia*, a newspecies of hermit crab (Decapoda:Anomura:Paguridae) from Japan. Crustacean Research, No. 25:86-92.
- 三島伸治. (2003)ヨモギホンヤドカリの生物地理と生活史. 生物科学ニュース, No. 379:14-16.
- 山田浩二. (2005) 泉州生きもの歳時記 ヤドカリ. 自然遊学館だより, No. 37:8-9.

(山田 浩二)

春は様々な生き物が蠢^{うごめ}きますが、活動が活発になるのは夏になってからです。私は山に囲まれた田畑とも一緒に生活しています。岬町淡輪の私の住まいする所は歩いて山すそへ5分、海へも5分です。田畑は自宅から3kmほどはなれたところにあります。だから、山並みからしますと、かなり山奥の田畑ということになります。

なぜ、そんな山奥で作物を作っているのかと問われますと、即座に答えることが出来ず。現在はすこぶる健康志向です。環境や衛生上の問題はくまなく調査され、その取り組みも進んでいます。しかし、「作物における水という問題」はまだ未開発であるように思います。作物のほとんどの成分は水であるのに、その水が問題化されていません。最近かなり有名になった泉州名物水ナスは当然水で作ります。しかし、その水は農業用水と生活排水路とを兼ねた水路から灌^{かんすい}水されます。シャンプーや洗濯をした排水も混在して灌^{かんすい}水されるのです。農薬とか、化学肥料などはナーバスに問題にされるのですが水は俎^{そじょう}上にのぼりません。水こそ命の野菜が水抜きで語られるのは本末転倒です。

このことは春2「先生の通りに」で書きましたが、この号はその続きです。山間部の田畑は天から降った雨を一番最初に使います。人為でおかされていない(空気汚染の影響は受けているだろうが)水なのです。その

水で育てた気持ちのいい安心野菜です。しかし、大変作業が困難です。

- ・ 日照時間が少ない
- ・ 棚田かそのような形状になるので、大型の農機具使用が難しい
- ・ 山にいる害虫が作物に集中する
- ・ イノシシ、タヌキ、アライグマ、ネズミ等による食害
- ・ オオスズメバチ、マムシなどによる危害がある



(田畑の周囲の山) (中央にコゲラ)



(ジャガイモ畑)

以上のような困難の中で工夫と努力を重ねて栽培しているのです。私の場合は全くの趣味ですが、これが業ともなりますと、本当に大変です。同じ米でも 5 倍も 6 倍も

値段をつける必要があります。平野部でつくられた米は日照や温度の関係で山間の米よりは見栄えがいいものです。しかし、水と同時に蓄積された物質はやはり気になりますが 1 等米です。山間部の米はなかなか 1 等米にはなりません。この辺りのことに関心を持ってもらいたくて趣味農をしているのです。

しかし、天は味方です。冒頭の生き物が暑さと共に爆発的に動き出すのです。水田の中を覗き込みますと、ミジンコがぎっちり泳いでいます。そのミジンコをオタマジャクシが追っかけます。田植えと同時に放したメダカもおそらく口をあけているだけでミジンコが飛び込んできます。そのオタマジャクシやカエルをアオサギが狙います。最近、その様をじっと見つめていたカラスもアオサギの真似をして水田を動き回ります。もちろん私の大嫌いな長い生き物も顔を出します。スイカを狙ってタヌキやアライグマが奔走します。(これは電柵というバッテリー仕掛けの道具で寄せ付けなくなりました。)周りの木々ではウグイスやホトトギスがさえず囀ります。トンボやチョウも飛び交います。なんともいえない世界です。

私の好きな本に「海中ミュージアム」という写真集(山と溪谷社 楚山いさむ著)があります。まさしくその山里バージョンです。頑なにおいしい水で作物を育てている私へのプレゼントです。

(川村 甚吉)

■寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2007年6月分まで)

<鳥類>

- ◆鈴子勝也さんより
メジロの巣 1点
和泉葛城山 2007年4月30日採集
- ◆高野晴一郎さんより
マヒワ 死体 1点
貝塚市二色 2007年5月13日採集
- ◆川口博さんより
カワラヒワ 死体 1点
貝塚市二色 2007年5月19日採集
- ◆前田哲さんより
ムクドリ 死体 1点
貝塚市島中 2007年5月21日採集
- ◆金克信、岩崎新さんより
ムクドリ 死体 1点
貝塚市二色 2007年5月30日採集
- ◆額田美子さんより
スズメ 死体 1点
熊取町 2007年6月8日採集

<両生類>

- ◆高野夏子さんより
イモリ 生体 2点
貝塚市蓄原 2006年10月14日採集

<魚類>

- ◆木室仁太さんより
ドンコ 生体 1点
貝塚市木積 2007年4月29日採集

- ◆食野俊男さんより
ウキゴリ 生体 3点
貝塚市島中 2007年6月15日採集

<甲殻類>

- ◆和田太一さんより
タカノケフサイソガニ 1点
大阪市南港野鳥園 2007年2月11日採集
- ◆児嶋格、花野晃一さんより
カギツメピンノ 4点
カクレエビ属 3点
兵庫県淡路由良 2007年3月21日採集
- ◆鈴子佐幸、田中正視さんより
ゴイシガニ 1点
岬町長松海岸 2007年4月4日
- ◆神野直研、都築勇人さんより
モクズガニ 生体 1点
貝塚市近木川河口 2007年4月20日採集
- ◆児嶋格、花野晃一さんより
ヨツハモガニ 6点 ほか多数
兵庫県淡路由良 2007年5月20日採集
- ◆食野俊男さんより
スジエビ 生体 多数点
貝塚市島中 2007年6月15日採集

<軟体動物>

- ◆鈴子佐幸さんより
イズミミドリガイ 1点
貝塚市二色浜 2007年4月5日採集

<クモ>

- ◆高野晴一郎さんより
イエオニグモ 1点
貝塚市千石荘 2007年5月27日採集

<昆虫>

◆浅井眞紀子さんより

ハラアカコブカミキリ 成虫 1点
熊本市小国町 2007年4月14日採集

◆森本静子さんより

アシマダラヒメカゲロウ 成虫 1点
シマハバチ属の一種 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年4月26日採集
ダビドサナエ 成虫 2点
貝塚市木積 2007年4月26日採集
トンボ羽化殻・アクリル封入標本 26点
(ヤマサナエのみ2点、他は各1点)
オオカワトンボ、ハグロトンボ、アオイトトンボ、オニヤンマ、コシボソヤンマ、カトリヤンマ、ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ、マルタンヤンマ、コヤマトンボ、オオヤマトンボ、オジロサナエ、オナガサナエ、オグマサナエ、タバサナエ、アオサナエ、キイロサナエ、ヤマサナエ、コオニヤンマ、タイワンウチワヤンマ、ショウジョウトンボ、シオカラトンボ、タイリクアカネ、コノシメトンボ、ウスバキトンボ

◆青柳正人さんより

コミミズク 成虫 1点
ヒゲボソゾウムシ属の一種 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年4月26日採集
クロハナムグリ 成虫 1点
ヒメクロゴキブリ 成虫 1点
貝塚市木積 2007年6月28日採集
ノコギリカメムシ 成虫 1点
ハイイロキシタヤガ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年6月28日採集

◆食野俊男さんより

ウンモンズズメ 成虫 1点
貝塚市二色 2007年5月4日採集

◆五藤武史さんより

ムカシトンボ 成虫 1点
ヨツボシモンシデムシ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年5月21日採集
トゲヒゲトラカミキリ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年5月22日採集
オオアオイトトンボ 羽化殻 1点
キマワリ 成虫 1点
貝塚市馬場 2007年6月8日採集
Carabus 属のオサムシ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年6月2日採集
キマワリ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年6月20日採集
トホシオサゾウムシ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年6月23日採集
クロホシテントウゴミムシダマシ 成虫 2点
貝塚市蕎原 2007年6月24日採集
ヒメサナエ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年6月27日採集
アオカミキリモドキ 成虫 1点
アオハナムグリ 成虫 1点
貝塚市蕎原 2007年6月30日採集
◆水谷雅子さんより
シロスジカミキリ 成虫 1点
貝塚市澤 2007年5月24日採集
◆竹本卓哉さんより
ノミバッタ 成虫 1点
貝塚市千石荘 2007年5月27日採集
◆高野晴一郎さんより
ヒゲナガハナノミ 成虫 1点
貝塚市千石荘 2007年5月27日採集

◆高野夏子さんより

タマカメムシ 成虫 1点

貝塚市千石荘 2007年5月27日採集

◆猫石洋子さんより

クビキリギス (ピンク型) 幼虫 1点

泉佐野市上瓦屋 2007年5月29日採集

◆大川フミ子さんより

コクワガタ 成虫 2点

貝塚市大川 2007年6月採集

■遊学館スタッフ日誌

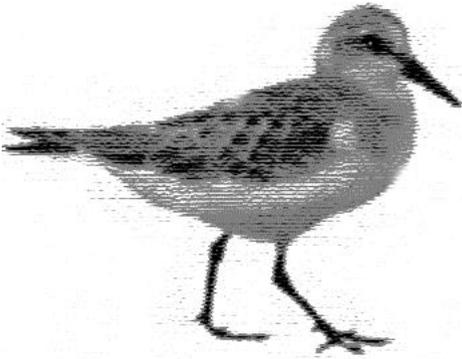
6月13日 「シロクマの剥製を引き取ってもらえますか？」と某企業から電話が掛かってきました。えっ！と頭の中が、迫力ある巨大なシロクマの妄想で一杯になり、たじろぎつつ話を伺いました。今まで、いろいろな生きものの寄贈の申し出がありましたが、こんなのは初めてです。よくよく聞けば、インターネットオークションに出品するが、もし落札されなければ引き取って欲しいとのこと。ワシントン条約に触れていないか、館内のどこに保管するかなど悩ましかったのですが、その後、連絡がこないことから、買い手が見つかったと思われま。ほっ... (山)

7月6日 数日前から左腕がかぶれています。かぶれの全形はほぼ楕円で、長径15cm・短径5cmもあります。思い当たるふしと言え、6月30日にハゼノキ(ウルシ科ウルシ属)の葉を切り取った



ことです。その時に汁液に触れてしまったのだと思います。ウルシかぶれは、触れた直後には現れないのですね。皆さんも、山野に入る時は、ウルシ属の植物(ウルシ、ツタウルシ、ヤマハゼ、ハゼノキ、ヤマウ

ルシ) に気をつけて、長袖の服を着用して下さい。(岩)



■おしらせ

夏期特別展「貝塚の野鳥」開催!

空、街中、干潟、ため池、田んぼに森…。ふと見渡すと、そこにはいつも鳥たちの姿があります。今回、自然遊学館ではこれまでの10年間の調査結果をもとに、現在貝塚市で確認されている178種の野鳥を紹介する初の野鳥展を行います。

1 自然遊学館では、交通事故や衝突死によって死んでしまった鳥たちを貴重な資料として収集してきました。館内に展示・保管されている鳥類の標本は、基本的に市民の皆さんが寄贈して下さった(職員が拾得したものもあります)遺体です。今回の展示会では、これらの剥製すべてを展示し、古巣、卵、生態写真、映像資料もふんだんに使って、鳥たちのふしぎで魅力的な生態にせまります。

夏鳥であるコアジサシのペーパークラフトが飛び交う会場内では、貝塚市で確認された野鳥の全リスト、河口域・住宅地・農耕地・和泉葛城山など環境毎に見られる鳥

を紹介しています。市内で撮影された、様々な環境でたくましく生きる鳥たちの姿を撮影した映像も必見。また、鳥に関連した図書をあつめた「鳥文庫コーナー」では、鳥の絵本や洋書を含めたさまざまな図鑑が見られます。鳥の折り紙やペーパークラフトも楽しめます。うまくできたら、会場内に飾ってください。

会場の入口では、みなさんから寄せられた写真をもとに、「貝塚の野鳥写真コンテスト」をあわせて行います。最優秀賞は投票で決まります。ぜひ、力作を見に会場まで足をお運び下さい。

日時：7月28(土)～8月30日(木)

場所：自然遊学館多目的室

自然遊学館だより 2007 夏号 (No. 44)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/index.htm>

発行日 2007. 7. 18

この小冊子は市内印刷で作成しています。

